淑徳大学
アーカイブズ・ニュース
NEWSLETTER of SHUKUTOKU UNIVERSITY ARCHIVES
第 12 号　平成 28 年（2016）2 月 1 日発行

― 体育祭の開催（昭和 47 年）―

開学から 2 年目の昭和 41 年（1966）11 月 6 日、第 1 回龍澤祭の最終日に「運動会」として開催したのが体育祭の始まりで、学生と教職員がともに汗を流す交流の場でもあった。当初は龍澤祭の一環として行われていたが、昭和 47 年（1972）より龍澤祭から独立し、体育祭実行委員会を組織し「秋季体育祭」として開催されるようになった。また、翌 48 年からは新入生歓迎行事の一環として「春季体育祭　新入生歓迎球技大会」が開催され、以後体育祭は春季と秋季の年 2 回開催されることとなった（『淑徳大学五十年史』第 2 章第 4 節参照）。

学祖・長谷川良信と社会事業の先覚者たち　Ⅱ
── 安達憲忠・小河滋次郎・田子一民 ──

淑徳大学アーカイブズ所長
長谷川　匡俊

今回は、学祖が社会事業への道に入る前後から、マハヤナ学園の設立、欧米留学の頃までを見通して、3 人の恩人ともいうべき先覚者との出会いについて取り上げてみよう。

安達憲忠

はじめに、岡山県出身で、自由民権運動の旗手として『山陽新報』を舞台に論陣を張るが、やがて上京し、渋沢栄一が院長をしていた東京市養育院の幹事に任じられ、以後、渋沢の片腕として活躍した安達憲忠（けんちゅう）（1857－1930）との出会いについてふれてみたい。

東京市養育院時代の安達憲忠
出典：内藤二郎編『安達憲忠関係史料集』
（1981 年、彩流社）

明治期における慈善事業の先駆者のなかには、何らかのかたちで自由民権運動に関わり、投獄経験を持つものが少なくない。安達もそのうちの一人である。彼が民権運動に挫折して上京したのは 1883（明治 16）年末のことだ。その後『福島新聞』に関係することもあったようだが、87 年再上京し、かつての政敵であった東京府知事高崎五六を訪ね、府雇員に採用され、91 年に養育院幹事となり、以後 29 年間もの長きにわたって「事実上の院運営担当者」の重責を果たしたのである。いま一つ重要なのは、安達が 9 歳のとき仏門（天台宗）に入り、若い時代から仏教者として仏教改革運動にも関わっていたことである。

さて長谷川の方だが、彼は 1915（大正 4）年宗教大学を卒業すると、恩師渡辺海旭の勧めもあって、直ちに東京府養育院の巣鴨分院に就職（見習い修業）した。巣鴨分院は 1909 年 3 月に新設され、幼少年全部を本院から移転したという。なお、この就職は、安達と渡辺との親しい間柄があって実現したものであることを忘れてはならない。安達の甥の安達大寿計によると、養育院時代からの特に親しい知友として挙げられている人物に、光田健輔・渡辺海旭・近角常観の 3 人がおり、長谷川の恩師渡辺はその一人である。安達と渡辺は性格的にも似通う点もあって、互いに相許し合う仲であり、仏教徒の社会活動家として、最もよき相談相手であった（光田健輔編・発行『黎明期に於ける東京都社会事業と安達憲忠翁』1956 年）。

安達は渡辺が主導する仏教徒社会事業研究会（1912 年、渡辺が主宰する「浄土宗労働共済会」に事務局を置く）発足時の実行委員の一人であり、その他複数の組織・団体で二人の交流は緊密であったから、自ずと渡辺の門下生も安達との接点を持つようになっていった。安達の遠縁にあたる内藤二郎が、「憲忠は海旭門下の三羽烏、中西雄洞、長谷川良信、三輪政一などとも親しくなり、中西は仏教徒

社会事業研究会幹事、三輪は養育院関係の四恩瓜生会の主任に、長谷川は巣鴨分院の児童教育に当たらせるようになった」（『社会福祉の先駆者 安達憲忠』彩流社、1993 年）と指摘する通りであろう。

養育院巣鴨分院に勤務して一年足らずのことだが、長谷川は激務がたたって、当時死病といわれた結核に倒れた。このとき、療養を兼ねて安房分院（09 年勝山保養所を移転）に転勤を命ぜられているが、これも安達の配慮であると思われる。しかも療養にあたり、長谷川は安達から「仏教社会事業の調査」という特別の任務を与えられることになったという（『長谷川良信全集』第 4 巻、pp. 517-518、以下『全集』とする）。それを裏付けるのが、渡辺海旭が主宰する浄土宗労働共済会の機関誌『労働共済』２巻１号（1916 年１月）巻末の「時報」である。旧臘、仏教徒社会事業研究会の忘年会と納会が渡辺の自坊西光寺で催された折、村瀬幹事から、斎藤康磨氏が逝去されたため「仏教徒社会事業史編纂員」の後任について提議があり、「安達渡辺両氏の推選（ママ）により長谷川良信氏に依頼することとして可決」とみえる。

こうして 1920 年 4 月、仏教徒社会事業研究会編『仏教徒社会事業大観』は発刊をみることができた。しかし現在では、近代仏教社会事業史を研究する者にとって貴重な文献でありながら、本書の編集が誰の手に委ねられていたのか忘れ去られている。先の『労働共済』6 巻 6 号（1920 年 5 月）には、同書発刊の広告文が掲載されており、そこには、「本書は斯道の先進長谷川冬民氏が、社会事業研究会の嘱によって苦心編輯せる所」と明記されているのである（「冬民」は長谷川の号）。療養中にもかかわらず、安達や渡辺の配慮によって調査に従事したことが長谷川の後半生を決定づける因縁となった。安達は、長谷川が後述のマハヤナ学園を創立した後も、しばしば訪ねて来ては激励を惜しまなかったようである。

小河滋次郎と田子一民

小河滋次郎（しげじろう）（1864－1925）といえば、その前半生は内務官僚として、また監獄学の研究者として感化教育をリードし、後半生は一転してその官途を棄て、「嘱託」というなかば自由人の境涯において大阪府の自治行政と関わりを持ち、社会事業に尽力した。ことに現在の民生委員制度の前身である「方面委員制度」の創設に関わり、著書『社会事業と方面委員制度』は社会福祉の古典として知られる（『社会福祉古典叢書２・小河滋次郎集』参照）。長谷川が小河と交流を持つようになるのは、後述のように小河が拠点を大阪に移し活躍していた時期である。

小河滋次郎

出典：『社会福祉古典叢書 2　小河滋次郎集』（1980 年、鳳書院）

つぎに、田子一民（たごいちみん）（1881－1963）であるが、彼は大正デモクラシー期における社会事業の成立を、内務行政の立場から体現した代表的な人物として知られる。1917 年内務省地方局初代救護課長、19 年社会課長、22 年に社会局長に就任し、同年、古典の一つに数えられる『社会事業』（帝国地方行政学会）を上梓している。本書の冒頭に「社会事業は社会連帯の思想を出発点とし、根柢として行はれて居る社会生活の幸福を得しめ、社会の進歩を促さうとする努力である」とあるのは有名であり、当時の「社会連帯的」社会事業思想を代表するといってもよい（『社会福祉古典叢

書5・田子一民・山崎巌集』参照）。もっとも、あの「トゥギャザー・ウイズ・ヒム」の名言が出てくる長谷川の『社会事業とは何ぞや』は1919年作で、田子のそれよりも3年早く、29歳のことである。昭和期に入ってからの田子の後半生は、政界に進出し衆議院議員となり、衆議院議長や農林大臣などの要職を歴任する一方、全国社会福祉協議会長をも務め、社会福祉に貢献した。

田子一民

出典：『社会福祉古典叢書5　田子一民・山崎巌集』（1982年、鳳書院）

ここに、大正期社会事業界における上記二人の先達と長谷川との興味深い関わりについて、長谷川自身が語っている貴重な一文がある。題して「忘れ得ぬ人々（1）（2）―社会事業風雪の歩み―」という。本文はもと浄土宗の『宗報』530・532号（1961年10月・12月）に掲載されたもので、後に『全集』第4巻に収められた。はじめに、長谷川社会事業の代名詞ともいうべき隣保事業「マハヤナ学園」創立に際し、小河が格別の関心を示していたと思われる文章を紹介してみよう。

> 隣保事業マハヤナ学園というものが、時の教界に、仏教社会事業の最上の在り方として讃えられ、自分が提唱した隣保事業の名称は早くも大正八年の初め、大阪の斯界の権威小河滋次郎博士の推奨によって内務省にも認められるようになり、巣鴨庚申塚の微々たる一事業が、そのモデル的な施設として、遂には天聴にも達し、大正九年には事業開始、僅かに一年にして（マハヤナ学園創立は大正八年一月十五日となっておる）即ち大正九年二月には、事業御奨励の思召しを以って御内帑金一封を賜わるという、当時としては実に異例の御沙汰を拝して、学園の存在は、地元は元より広く全国に及び、とくに仏教界に於ては、この小さな施設をモデルとして、隣保事業の態勢をとるところが、あちらにも、こちらにも出来上るという状況にあった（p.526、下線筆者）

欧米を中心に広がった「セツルメント」を「隣保事業」と翻訳したのは長谷川が最初だといわれているが、重要なのは、長谷川がその隣保事業のモデル的施設を創立して実践したことである。マハヤナ学園創立趣意書には、創立委員の外に、「顧問」として、社会事業界・仏教界等の歴々の名が記されている。その筆頭に見えるのが「法学博士 小河滋次郎」であった。小河の好意的「推奨」もあって、長谷川の経営するマハヤナ学園は一躍世の脚光を浴びるようになっていたのである。ちなみに、先の安達憲忠も「顧問」に名を列ねている。

小河がことのほか隣保事業に関心を示した理由には、おそらく彼の提唱にかかる方面委員制度との関連があったと考えられるが、今後の課題としておきたい。もう一つ、長谷川が友人に宛てた、巣鴨の二百軒長屋に飛び込む直前の手紙を読むと、この間、大阪方面における活動の可能性についても模索していた節がある。小河との接点があったのかもしれない。

長谷川は1922年3月、海外留学に旅立つことになる。主にアメリカとドイツであって、その間の記録は「欧米の宗教及び社会事業視察記」（『全集』第2巻所収）等に詳しい。海外留学に際して「内務省嘱託」の辞令をもらうことができたのは、小河・田子の格別の配慮があってのことで、以下にそれを物語る一文をあげておこう。

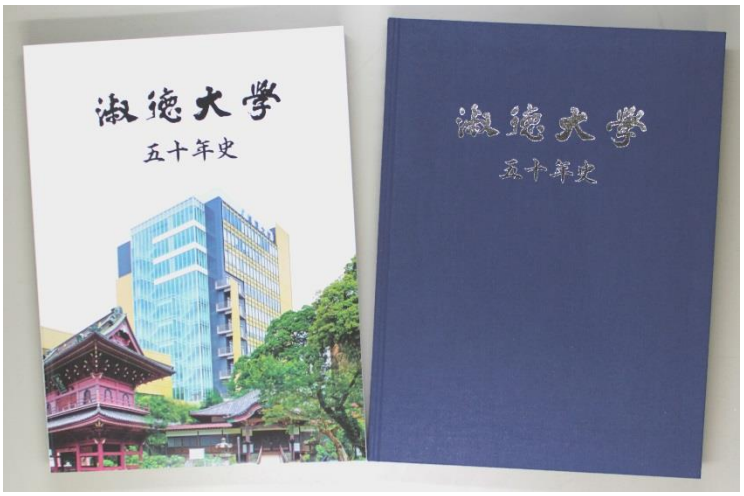
> この前亡くなった田子先生（註…一民氏）が社会局長になったばかりのときだったが、僕は隣保

事業の調査のため、ヨーロッパ、アメリカを回わりたいが、内務省の嘱託にしてくれと小河滋次郎さんをとおして頼んだわけだ。小河さんには大変かわいがられた。それで隣保事業という名も私がつけたんだが、今後もこういう仕事をやっていかなきゃならんから、と田子さんに話してくれたんです。（中略）それで辞令はもらったが、名前だけで内務省から金は一文もくれないわけだ。しかし辞令をもらったから、いわゆるオフィシャルの旅券が下りた。それから金のほうは、当時、添田敬一郎さんが協調会の常務理事をやっており、そこからもらっていったんだが、それも田子先生が橋渡しをしてくれた（「先駆者の道」1965 年、『全集』第 4 巻、pp. 544-545）。

こうしてみると、実に長谷川は斯界の大先輩たちから目をかけられ、若きホープとして期待されていたことがわかる。こうした人脈が築かれてゆくのも、おそらく恩師海旭のサポートがあったからであろう。

長谷川によれば、「内務省嘱託」のポストは、留岡幸助・生江孝之・相田良雄・高田慎吾・牧野虎次氏ら錚々たる諸先輩に続くものであって、小河・田子の両氏と協調会の添田常務にはことのほか感謝している。そのせいか、米国滞在中に日本へ送った近況報告の宛先には 3 氏の名前があがっている。また、特に長谷川の場合は、「前記諸氏が単に内務省嘱託なるに反し、現職の社会事業経営者であった為め現業家を尊重するアメリカでは非常に優遇された」（同上書、p. 520）というから、「内務省嘱託」の肩書は、海外でも大いに役立ったようである。

『淑徳大学五十年史』刊行



去る平成 27 年（2015）9 月 26 日、淑徳大学創立 50 周年記念式典の日に『淑徳大学五十年史』が刊行されました。淑徳大学の年史としては、昭和 51 年（1976）に『淑徳大学十年史』を刊行して以来のことで、平成 20 年（2008）に「淑徳大学 50 年史企画準備委員会」を立ち上げ、翌年に「淑徳大学 50 年史編纂委員会」の設置が承認されてから、8 年の調査・研究の成果として結実したものが本書です。執筆には淑徳大学および学校法人・大乗淑徳学園の教職員 19 名があたり、これまでの淑徳大学の 50 年のあゆみを総括し、次の時代に前進するための指針を示すものとなっています。

本書の内容は、「沿革編」と「資料編」に別れ、「沿革編」はそれぞれの時代の特徴を踏まえて

「序章　　学祖長谷川良信の開学構想―淑徳大学創立前史―（1962 年～1964 年）」
「第 1 章　草創期の淑徳大学（1965 年～1968 年）」
「第 2 章　教育改革と揺れるキャンパス（1969 年～1979 年）」
「第 3 章　教育環境の一新と教学の新展開（1980 年～1995 年）」
「第 4 章　利他共生の高度化と国際化から大学改革の萌芽へ（1996 年～2002 年）」

「第 5 章　大学改革と新学部のさらなる展開（2003 年～2011 年）」
「第 6 章　21 世紀の教育ニーズに応える（2012 年～2015 年）」
の 7 章立てで、淑徳大学の 50 年の変遷が「建学の精神」の継承としてわかりやすくまとめられています。

一方「資料編」のほうは、

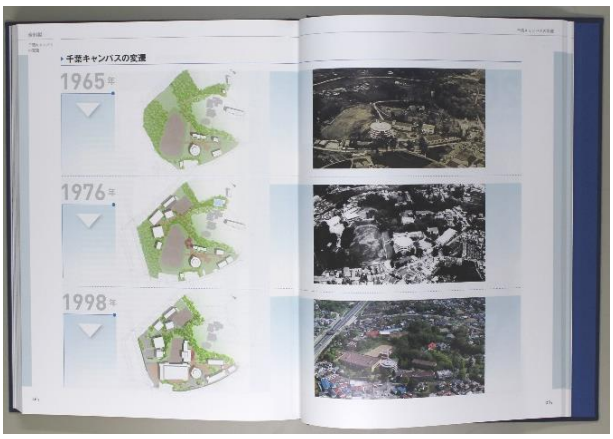
「大学概要」「キャンパス概要」「組織図」「歴代理事長・学長・副学長」「大学院の変遷／歴代大学院研究科長」「学部の変遷」「歴代学部長」「学生数の推移」「千葉キャンパスの変遷」「附置施設」「年表」「関連文献」

を含み、現在に至る本学の足跡を写真や表によって具体的に明らかにしています。また、最後に「索引」を付しており、項目検索の便宜を図っています。

なお、本書には上製本版と並製本版の 2 種類があります。

本書に関する問い合わせは、淑徳大学アーカイブズまでお願いします。

問合せ先
淑徳大学アーカイブズ　　℡　043（265）7526
e-mail　archives@soc.shukutoku.ac.jp



「淑徳大学アーカイブズ史料講読会」のご案内
── 参加者を募集しています ──

淑徳大学アーカイブズでは、地域との連携を図り、地元の方々との交流を深めるため、「史料講読会」を開催しています。当アーカイブズが所蔵している史料をはじめとして、江戸時代から近代にいたる史料を幅広く読みながら、当時の社会や地域について学んでいこうと思っています。

会は**毎月第 2・第 4 金曜日の午前 10 時から午後 3 時頃**まで、淑水記念館で開催しています。どなたでも参加できますし、その日の都合に合わせて途中から参加いただくこともできます。初心者の方も大歓迎ですので、くずし字が読めるようになりたい方や昔のことに興味のある方はぜひ当アーカイブズまでご連絡下さい。

皆さんで楽しく史料を読んでいければと思います。

淑徳大学アーカイブズ日誌（2015 年 8 月～12 月）

8 月 5 日	第 3 回淑徳大学自校教育研究会出席（於池袋サテライトキャンパス）。立教大学名誉教授寺﨑昌男氏講演。
8 月 18 日	佛教図書館協会研修会の見学会準備のため成田山仏教図書館と成田山新勝寺下見。
8 月 20 日	神奈川県立公文書館で文献調査。
8 月 22 日	福田会育児院史研究会出席（於東京児童福祉研究所九段研究所）。
8 月 27 日	全国大学史資料協議会のウェブサイト講習会参加（於明治大学駿河台キャンパス）。
9 月 3 日	卒業生の那須伊佐子氏より本学第 3 代・5 代学長前原光雄先生の書（額入り）寄贈。
9 月 4 日	看護栄養学部看護学科の学生「淑徳大学 50 年のあゆみ展」見学。
9 月 11 日	第 90 回淑徳大学アーカイブズ史料講読会開催。
9 月 15 日	『淑徳大学アーカイブズ・ニュース』第 11 号発行。
9 月 19 日	第 4 回淑徳大学自校教育研究会出席（於埼玉キャンパス）。
9 月 26 日	淑徳大学創立 50 周年記念式典開催。『淑徳大学五十年史』刊行。
9 月 29 日	敬愛大学の矢作由美子氏、千葉・関東地域社会福祉史研究会会誌閲覧のため来室。
10 月 2 日	福田会育児院史研究会出席（於セントラルレジデンス新宿シティタワー）。
10 月 2 日	コミュニティ政策学部の 1 年生（石川久・日野勝吾先生引率）「淑徳大学 50 年のあゆみ展」見学。
10 月 7 日～9 日	全国大学史資料協議会 2015 年度総会・全国研究会参加（於東北大学・東北学院大学）。
10 月 17 日	千葉・関東地域社会福祉史研究会 2015 年度第 1 回運営委員会出席。
10 月 22 日～23 日	佛教図書館協会研修会開催（於千葉キャンパス・成田山仏教図書館・成田山新勝寺）。
10 月 23 日	第 91 回淑徳大学アーカイブズ史料講読会開催。
10 月 26 日	2015 年度第 1 回淑徳大学アーカイブズ運営委員会開催（於大乗淑徳学園本部）。
10 月 28 日～30 日	産業現場実習として市原特別支援学校生徒 1 名受け入れ。
10 月 28 日	第 5 回淑徳大学自校教育研究会出席（於池袋サテライトキャンパス）。

11 月 6 日	福田会育児院史研究会出席（於東京児童福祉研究所九段研究所）。
11 月 12 日～13 日	全国歴史資料保存利用機関連絡協議会全国大会参加（大仙市大曲市民会館等）。
11 月 13 日	第 92 回淑徳大学アーカイブズ史料講読会開催。
11 月 14 日	地域社会福祉史研究会連絡協議会交流会出席（於東京キャンパス）。
11 月 27 日	マハヤナ学園の職員 13 名「学祖展」「淑徳大学 50 年のあゆみ展」見学。
11 月 27 日	第 93 回淑徳大学アーカイブズ史料講読会開催。
11 月 29 日	立命館大学国際平和ミュージアム・同志社大学同志社ギャラリー見学。
11 月 30 日	自校教育について同志社大学神学部原誠教授に聞き取り調査実施。
12 月 9 日	第 6 回淑徳大学自校教育研究会出席（於池袋サテライトキャンパス）。
12 月 11 日	第 94 回淑徳大学アーカイブズ史料講読会開催。
12 月 11 日	全国歴史資料保存利用機関連絡協議会関東部会第 283 回定例研究会参加（於相模原市立公文書館）。
12 月 13 日	故吉田久一先生遺著刊行記念の集い出席。
12 月 13 日	故吉田久一先生の実家所蔵の先生関連資料寄贈。
12 月 14 日	大空社の西田和子氏来室。
12 月 17 日	全国大学史資料協議会東日本部会第 97 回研究会参加（於武蔵野美術大学新宿サテライトキャンパス）。
12 月 19 日	千葉・関東地域社会福祉史研究会第 2 回運営委員会出席（於アットビジネスセンター池袋駅前別館）。
12 月 25 日	「淑徳大学 50 年のあゆみ展」閉幕。

淑徳大学アーカイブズでは、大学及び大乗淑徳学園に関係する資料を広く収集しています。

①大学及び学園が発行した新聞・雑誌・広報誌・年報・報告書等。

②学生時代の写真・講義ノート・教科書・手帳・日記・記念品・記章・各種書類等。

③学生時代に使用していたもの。

④大学及び学園のサークルや研究会の活動を示すもの。

上記以外の物でも結構ですので、お気づきのものがあればお気軽にご連絡下さい。

また、大学及び学園の各部署や学部学科、機関で保存期間の満了した文書、あるいは廃棄の対象となる文書が発生した場合は、大学アーカイブズまでご一報下さい。

SHUKUTOKU

淑徳大学

アーカイブズ・ニュース　第 12 号

NEWSLETTER of SHUKUTOKU UNIVERSITY ARCHIVES

発行日　2016 年 2 月 1 日

編集・発行　淑徳大学アーカイブズ

〒260-8701

千葉県千葉市中央区大巌寺町 200

TEL　043-265-7526（直通）

e-mail　archives@soc.shukutoku.ac.jp